

國桃生郡日高見神社あり、立入信友云、日高は景行天皇紀を思ふに、今の蝦夷地にて、常陸はかの日高へ通ふ道なれば、日高道なるべしといへり、この説いとめでたし、こを思へば、顯昭が説も捨がたし、或書に、風土記として引たるには、此國之邊常鹽滿、民家多有煩、故宣曰、此國于立成陸、則百姓安、故曰飛多智也とあるは、いかゞとぞおもはる、

〔常陸紀行〕常陸國上古は海水逆流して遷移常なかりしに、後來漸々潮退き、人民常に陸地を得て居を安んじけるゆる常陸國と云、略又常とは永久無盡の意、陸とは路の言にして、是國經、歴日久しく、いよゝ陸路の無盡なるを見るときもいへり、又江海陸地一續直路ともいへり、又于立成陸ともいひ、或はひたかち、或はひたみちなど云、以上皆常陸の國名因て來れる處なり、然るに常陸は其地高遠にして、先に日を見るゆるに、日高見の國と云説あり、按に、日本武尊上總より轉りて陸奥國に入ると云々、蝦夷の賊首島津神國津神等竹の水門に屯すと云々、竹はタカにして、陸奥國桃生郡に今、陸奥國桃生郡に今、神社あり、又蝦夷既に平らぎ、日高見國より還りて、西南の方歴常陸と云々、日高見の神社あり、これに因て見れば、日高見國とは高遠の地を總稱せるにて、一處の稱にあらざるなるべし、又東西の國を爲日縱、ひのたし又朝日之直刺國、なみさ又青香具山者、かや日經の大御門など、古くいひなせる言葉もあれば、日高見國と稱せるものは、必しも常陸國而已ならず、今の常陸より以東の國を總稱せるものと覺ゆ、奥州を陸奥といへるも常陸の奥といへる意にや、多珂郡勿來關の地方に道口といへる郷あり、陸奥の入口と云意なるべし、

〔冠辭考〕衣手の ひたち

万葉卷九に、筑波山歌衣手、コモテノヒ、タチノクニ、フタノクニ、ノク、常陸國二並筑波乃山乎云々、こは在滿がいへる、ひだとつゞけたらんと、今考るに、古の袖ははゝのせばくて、たけの長ければ、手拱にも、事をなすにも、袂のくだりをたぐる故に、ひだ多かるべし、依て右の説をよしとす、和名抄に、襜褕周禮註云、祭服朝服襜褕無數、訓比多米、此こ